

京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム

「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」31 研究会

ユーラシア古語文献の文献学的研究

NEWSLETTER

No. 6 2004/6/23

目 次

活動報告  
研究会報告の要旨  
次回研究会の開催について  
編集後記

活 動 報 告

第 12 回研究会が開催されました。

◆第 12 回研究会◆

日時 2004 年 3 月 6 日(木) 午後 2 時～午後 6 時

場所 京都大学文学部 羽田記念館

「象形文字ルウィ語の解読の歴史と現状」

吉田 和彦 (京都大学大学院文学研究科教授)

「象形文字ルウィ語の印章」

Natalia Bolatti Guzzo (ナポリ大学上級研究員)

研究会報告の要旨

第12回研究会 (2004年3月6日 羽田記念館)

1. 報告—①「象形文字ルウィ語の解読の歴史と現状」

吉田 和彦 (京都大学大学院文学研究科教授)

2. 報告—②「象形文字ルウィ語の印章」

Natalia Bolatti Guzzo (ナポリ大学上級研究員)

1. 第12回研究会報告—①

「象形文字ルウィ語の解読の歴史と現状」

吉田 和彦

一般に解読という場合、問題となっている言語の体系が不明であることはいうまでもないが、そこに使用されている文字の組織がすでに明らかな場合とそうでない場合とがある。すなわち、既知の文字で未知の言語が記録されている場合と、未知の文字で未知の言語が記録されている場合である。前者の代表的な例としては、紀元前16世紀から13世紀にかけてアナトリアのヒッタイト帝国で使用されたヒッタイト語がある。ヒッタイト語が書き記されている楔形文字はメソポタミアから借用されたものであるため、シュメール語やアッカド語について知識を持っている人にとっては、ヒッタイト語の発見当初から粘土板の文字はなじみのあるものだった。これに対して、後者の例としてあげられるのは、ここで取りあげる象形文字ルウィ語である。

象形文字ルウィ語の資料はヒッタイト帝国の時期に遡る印章もあるが、より長い碑文はヒッタイト帝国滅亡後に、帝国領土内に住んでいたルウィ系の民族がアナトリア南東部やシリア北部にたてた数々の都市国家に残した石碑資料にみられる。これらの石碑資料は紀元前12世紀から8世紀にかけて記録されたと考えられる。その解読の歴史を、以下で簡潔に述べたい。

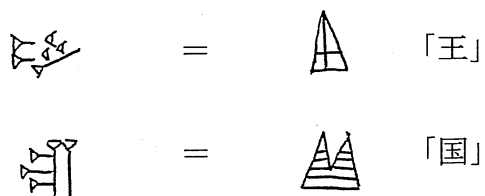
この言語は、ヒッタイト語のようにひとりの天才によって解読が行われたのではなく、複数の国の研究者たちの努力により、解読が進められてきた。1870年頃から独自の象形文字で切り刻まれた碑文が発掘され、19世紀の後半にまずオックスフォード大学の Archibald H. Sayce がこの碑文の研究を行った。Sayce は、そこで用いられている文字をヒッタイト象形文字 (Hittite Hieroglyphs)、そしてその文字で書かれている言語を象形文字ヒッタイト語 (Hieroglyphic Hittite)

と名付けた。彼は文字の数がアルファベットにしてはあまりに多すぎることを見抜き、象形文字が表意文字と表音文字からなっていると推定した。Sayce があげた重要な功績のひとつに、図1に示した「タルコンデモスの印章」の分析がある。この印章を、Sayce は「ヒッタイト解読におけるロゼッタストーン」と呼んだが、同心円の外側には楔形文字が刻まれ、内側には中央に人物の姿が描かれており、その両側に同一の象形文字が刻まれている。

(図1)



象形文字と楔形文字は同じ内容を表わしていると考えられるため、楔形文字部分から「エルメの国の王タルコンデモス」と読むことができる。これをふまえて、「王」と「国」を表わす楔形文字で書かれた表意文字に対応する、象形文字の表意文字を Sayce は決定した。



その後、新しい碑文がつぎつぎと発見報告されたが、研究のめざましい進展はみられず、解読作業は遅々として進まなかった。しかしながら、1930年頃からイタリアの Piero Merriigi、アメリカの Ignace Gelb、スイスの Emil Forrer、ドイツの Helmut Bossert などの学者の努力により、徐々に多くの成果があらわれてきた。彼らは、同時代のアッシリア楔形文字資料から知られる地名や王名と象形文字碑文にみられる地名や王名を同定する試みを積み重ねながら、表音文字の音価や表意文字の意味を推定した。また、ヒッタイト語と同じ言い回し（たとえば「——王、——王の息子、——王の孫、——王の子孫」や「これこれのことをするものは、王であれ、主人であれ、そのものを神々が罰するように」と考えられる例から、「息子」、「孫」、「子孫」にあたる表意文字や関係代名詞にあたる表意文字を推定した。このような根拠を要する作業の結果、第2次世界大戦までに、55の表音文字の音価と多くの表意文字や限定詞の意味について、ほぼ同じ見解に到達した。

1947年には、ついにトルコ南東部のカラテペで75行からなる象形文字とフェニキア語との併記碑文が、Bossert によって発見された。この発見によって、それまでの研究が正しい方向を進んでいたことが確認された。そればかりでなく、

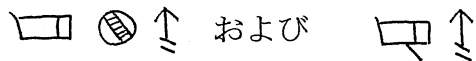
さらにいくつかの文字の音価と意味が明らかにされ、動詞の活用や名詞の曲用などについても多くのことが分かった (Bossert はカラテペ碑文の全容を発表しないまま、自動車事故で亡くなった。以後、1999 年まで、この碑文は写真ですら公開されることがなく、Bossert の遺稿をもとにして Merrigi が書き写した手書き資料に頼らざるをえなかった。)

その後の解読の歴史のなかで大きな転機になったのは 1973 年である。この年にロンドンで開かれた王立アジア協会のシンポジウムにおいて、イギリスの David Hawkins、Anna Morpurgo Davies、ドイツの Günter Neumann が 4 つの表音文字に対して従来とは異なる音価を提案した。それはつぎの 4 つの文字である。

	↑	⇑	∩	⇓
古い解釈	i	ī	a	ā
新しい解釈	zi	za	i	ia

これらの文字について、それ以前は使われる頻度が高いという理由だけで母音を表わすと考えられており、また ⇓ という補助記号は母音の長さを示すと推定されていた。しかしながら、実際にはこの推定を裏付ける具体的な根拠があるわけではなかった。

これに対して、うへの 3 人の学者は独自の根拠に基づいて、新しい解釈を提出した。その当時トルコで発掘された大甕に、目盛りとして象形文字が刻まれているものがあつた。その象形文字は、



で、従来の読みに従うと、tu-ru-ī および tu+ra-ī となる。これに対応する楔形文字の目盛りは、tè-ru-si あるいは tèt-ru-si である。ここで問題になるのは、3 つ目の ⇑ という象形文字である。

象形文字 tu-ru-⇑ および tu+ra-⇑ = 楔形文字 tèt-ru-si (tèt-ru-si)

この対応において、もし ⇑ という象形文字が従来のように ī を表わしているのなら、楔形文字の si と合わない。もちろん、3 つの文字のどれをとっても、母音についての一致は不完全であるが、うへの対応は ⇑ が「摩擦音+母音」の音価を持つことを強く示唆している。そこで、彼らは ⇑ の子音部分として、ヒタイト語や楔形文字ルウィ語といった他のアナトリア諸語にはみられるが、

それまでの象形文字には欠けていた z を推定した。また、従来母音の長さを示すと考えられていた ≡ という補助記号に対しても、古い碑文では ≡ の代わりに à を表わす ∪ が使われていることが分かったために、補助記号 ≡ は a を示していると考えた。すなわち、↑ は za、↑ は zi を表わすと考えたのである。また、この新しい解釈に従うと母音 i を表わす文字がなくなってしまうために、従来 a を表わすと考えられていた ∩ は i、ā を表わすと考えられていた ≡ を持つ ∩ は ia を表わすと彼らは提案した（うえで示した古い解釈と新しい解釈の違いをみられたい。）。この 4 つの文字が表わす音価の変更にもなつて、これまで同じく i、ī、a、ā と読まれていた他のいくつかの同音文字にも、zi、za、i、ia という新しい音価が与えられるようになった。

この革新的な解釈によって、従来不可解だったスペリングの謎が取り除かれたばかりでなく、この言語に新しい系統的な位置づけを与えられた。たとえば、新しい読みでは「これ」を意味する指示代名詞および複数与格語尾はそれぞれ za-と-(n)za になり、ヒッタイト語の対応形式 ka-と-aš ではなく、楔形文字ルウィ語の za-と-nza に合致するようになった。これに代表される例により、Sayce 以来、象形文字ヒッタイト語と呼ばれていたこの言語が楔形文字ルウィ語などのルウィ系の言語に近いことが明らかになり、現在では一般に「象形文字ルウィ語」と呼ばれるようになっている。

象形文字ルウィ語の文字解読は、意味が確定できない文字が依然としてかなり残っているとはいえ、かなり進んだ段階にあると言えるであろう。これに対して、言語の組織の解明という点では、不明な部分がかかり残っており、体系的な文法記述が提出されることが期待される。

また、印欧語比較文法の視点からも、象形文字ルウィ語は興味ある事実を提供してくれる。その一例をあげたい。図 2 に示したのは、Karkamiš Ala という石碑である。

(図 2)



この碑文の翻字と訳は以下の通りである。

1 EGO-mi-i <sup>1</sup>BONUS-ti-sa <sup>1</sup>su-hi-si-i REGIO-ní DOMINUS-ia-i-sa |BONUS-mi-sa

2 FEMINA-ti-i-sa wa/i-ti-' mi-i-ta-' REL-i-ta REL-i-ta

3 |á-ta<sub>5</sub>-ma-za i-zi-i-sa-ta-i |mu-pa-wa/i-ta-'

4 |BONUS-sa<sub>5</sub>+ra/i-ti CUM-ní i-zi-i-sa-ta-i

"I (am) BONUS-tis the Country-Lord Suhis' dear wife. Wherever my husband honors his (own) name, he will honor my own also with goodness."

3行目と4行目に i-zi-i-sa-ta-i “honors” という3人称単数現在能動態の動詞が記録されている。注目すべきは動詞語尾が-tiではなく、-iである点である。サンسكريット語などの他の印欧諸語では、現在能動態動詞は一般に1人称単数-mi、2人称単数-si、3人称単数-tiという語尾（あるいはこれに類似した語尾）で特徴づけられる。他方、ヒッタイト語ではこの語尾とは別に、1人称単数-*hi*、2人称単数-ti、3人称単数-iという語尾を取る、いわゆる*hi*-動詞というクラスがある。このクラスがヒッタイト語だけにみられる孤立した特徴ではなく、象形文字ルウィ語にも存在することをこの碑文は示している。*hi*-動詞の起源は印欧語比較文法の重要な問題のひとつであるが、この問題の解明に向けて鍵となる重要な事実をこの言語は持っているのである。

## 2. 第12回研究会報告—②

### Seals in Hieroglyphic Luwian

Natalia Bolatti-Guzzo

Istituto Universitario Suor Orsola Benincasa - Napoli

The Hieroglyphic writing system was used in Anatolia from the first half of the second millennium B.C. (i.e., XVII/XVI century B.C.) to the first half of the first millennium B.C. (i.e., VIII century B.C.). At the beginning, Hieroglyphs were used on seals and for a long time, at least for three centuries, they were recorded only on seals. The nature and purposes of glyptics seem to have strongly conditioned the initial developments and the structure of the Hieroglyphic script itself, which never later lost its essential character of visible code of communication.

### 1. Pre-writing experiences

During the XVIII and XVII centuries B.C. different sets of symbols were used on seals at various Anatolian centers. These symbols were pressed on vases or on clay lumps attached to various kinds of containers, thus serving as marks in connection with local administrative procedures. Some of these symbolic systems such as that attested at Karahöyük near Konya (south-western Anatolia) may be regarded as a sort of proto-signaries.

### 2. First attestations of the Hieroglyphic writing

The appearance of the hieroglyphic writing seems to be strictly connected to the gradual process of political unification of central Anatolia which led to the formation of the Old Hittite Kingdom (XVII-XVI centuries B.C.). Hieroglyphs were used on seals to write the names and the titles of state officials and functionaries. The writing system is mixed logo-syllabic. Especially developed was the group of ideograms denoting titles. But, in general, the signary was not yet stabilized as to its values; therefore we are unable to read the majority of these ancient signs.

### 3. Hieroglyphic writing and royal power

The subsequent developments of the hieroglyphic writing system have a political background. From XVI to XIII century B.C. the Hittite kings used inscribed seals to seal their official documents. Most of these seals are digraphic (i.e., they contain legends both in cuneiform and in hieroglyphic script.). Since hieroglyphs had a highly pictorial character, and the interchangeability between written and visual codes was always possible, the hieroglyphic legends containing names and titles of kings and queens often present complex compositional schemes, which could vary from one reign to another.

Propagandistic effects are achieved in different ways such as the following:

- a) The enclosure of the hieroglyphic signs within a particular frame (cf. the so-called aedicula-seals)
- b) The introduction of iconographical representations accompanying/including the hieroglyphic signs
- c) The choice of special signs for writing names
- d) The introduction of further titles or epithets.

#### 4. Seals of officials, princes and vassal kings

The seals of officials and dignitaries of the Hittite empire reflect some features of the royal glyptics, although in a more 'modest' way. A general principle of symmetry governs the organization of the central field. Sometimes a figure appears on the center, representing the owner of the seal. The owners of these seals are dignitaries, officials, nobles and even women (princesses or noble women).

#### 5. Hieroglyphic seals and monumental inscriptions

During the thirteenth century B.C. Hieroglyphic rock- and monumental inscriptions began to be attested in the following manner.

- a) Rock inscriptions reflect inscriptions on seals (figure followed by name+title(s)).
- b) Short monumental inscriptions: celebrative (names + titles + genealogy of the king)
- c) Long monumental inscriptions: narrative (on different lines, clearly written in Luwian) (late XIII century B.C.)

#### 6. Hieroglyphic Luwian seals in the first millennium

Personal seals or magical inscribed stones/amulets. Signs are stylized. The seal inscriptions sometimes reflect the linear Luwian inscriptions on stone.

### **Bibliographical references**

#### General characteristic of the Hieroglyphic Luwian writing system

E. Laroche, *Les hiéroglyphes hittites. Ière partie: l'écriture*, Paris 1960.

P. Meriggi, *Hieroglyphisch-hethitisches Glossar*, Wiesbaden 1962.

M. Marazzi, *Il geroglifico anatolico. Problemi di analisi e prospettive di ricerca*, Roma 1990.

M. Marazzi, Il cosiddetto geroglifico anatolico: spunti e riflessioni per una sua definizione, in: *Scrittura e civiltà* XV, 1991.

H. C. Melchert (ed.), *The Luwians*, Handbuch der Orientalistik 68, Leiden-Boston 2003.

#### General references on seals and sealing

H. G. Güterbock, *Siegel aus Boğazköy I*, Berlin 1940.

H. G. Güterbock, *Siegel aus Boğazköy II*, Berlin 1942.



H. G. Güterbock, Seals and Sealing in Hittite Lands, in: *From Athens to Gordion – Papers of a Memorial Symposium for R.S. Young held at the University Museum*, Philadelphia 1980, 51-63.

Karahöyük

S. Alp, *Zylinder und Stempelsiegel aus Karahöyük bei Konya*, Ankara 1968 (in particular: Chapter X).

Ancient seals from Boğazköy-Hattuša

R. M. Boehmer-H.G. Güterbock, *Glyptik aus dem Stadtgebiet von Boğazköy. Grabungskampagnen 1931-1939, 1952-1978*, in: *Boğazköy-Hattuša XIV*, Berlin 1987 (in particular: Chapter III, „Althethitische Zeit (Zeit der Unterstadt 3)“, pp. 33-56).

C. Mora, *L'Étude de la glyptique anatolienne. Bilan et nouvelles orientations de la recherche*, in *Syria* 71, 1994.

第 13 回、第 14 回研究会の開催について

下記のとおり COE 第 13 回研究会および第 14 回研究会を開催します。  
皆様のご参加をお待ちしております。

☞ COE 第 13 回研究会 ☜

日時 : 2004 年 7 月 13 日 (火) 午後 1 時～午後 2 時 30 分

場所 : 京都大学文学部 新館第 2 講義室

“Topics in the Indo-European consonant system”

Brent Vine (UCLA 教授)

☞ COE 第 14 回研究会 ☜

日時 : 2004 年 7 月 17 日 (土) 午後 3 時～午後 5 時

場所 : 京都大学大学院文学研究科附属

ユーラシア文化研究センター (羽田記念館)

〒603-8832 京都市北区大宮南田尻町 12

TEL : 075-491-6027

“Greek *σφήν* ‘wedge’, English *spoon*: An Indo-European etymological  
problem and the phonology of the Indo-European laryngeals”

Brent Vine (UCLA 教授)

編集後記

COE31 研究会ニューズレター第 6 号をお届けいたします。今後も活発に研究会等を企画して参りますので、皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

連絡先

「ユーラシア古語文献の文献学的研究」研究会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科言語学研究室 (大崎)

Tel : 075-753-2862 Fax: 075-753-2827

E-mail: [eurasia-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp](mailto:eurasia-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp) Webpage: <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurasia/>